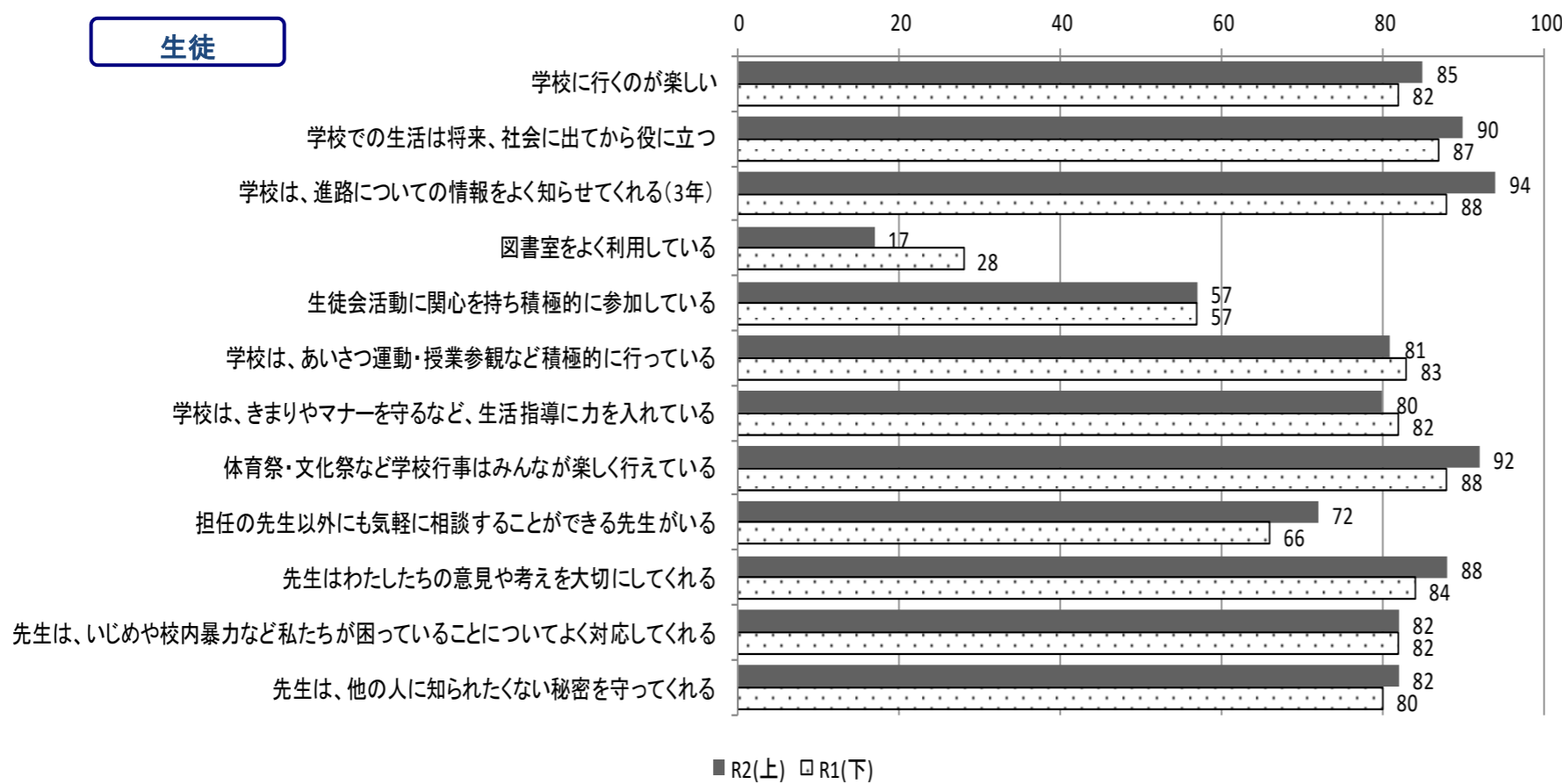


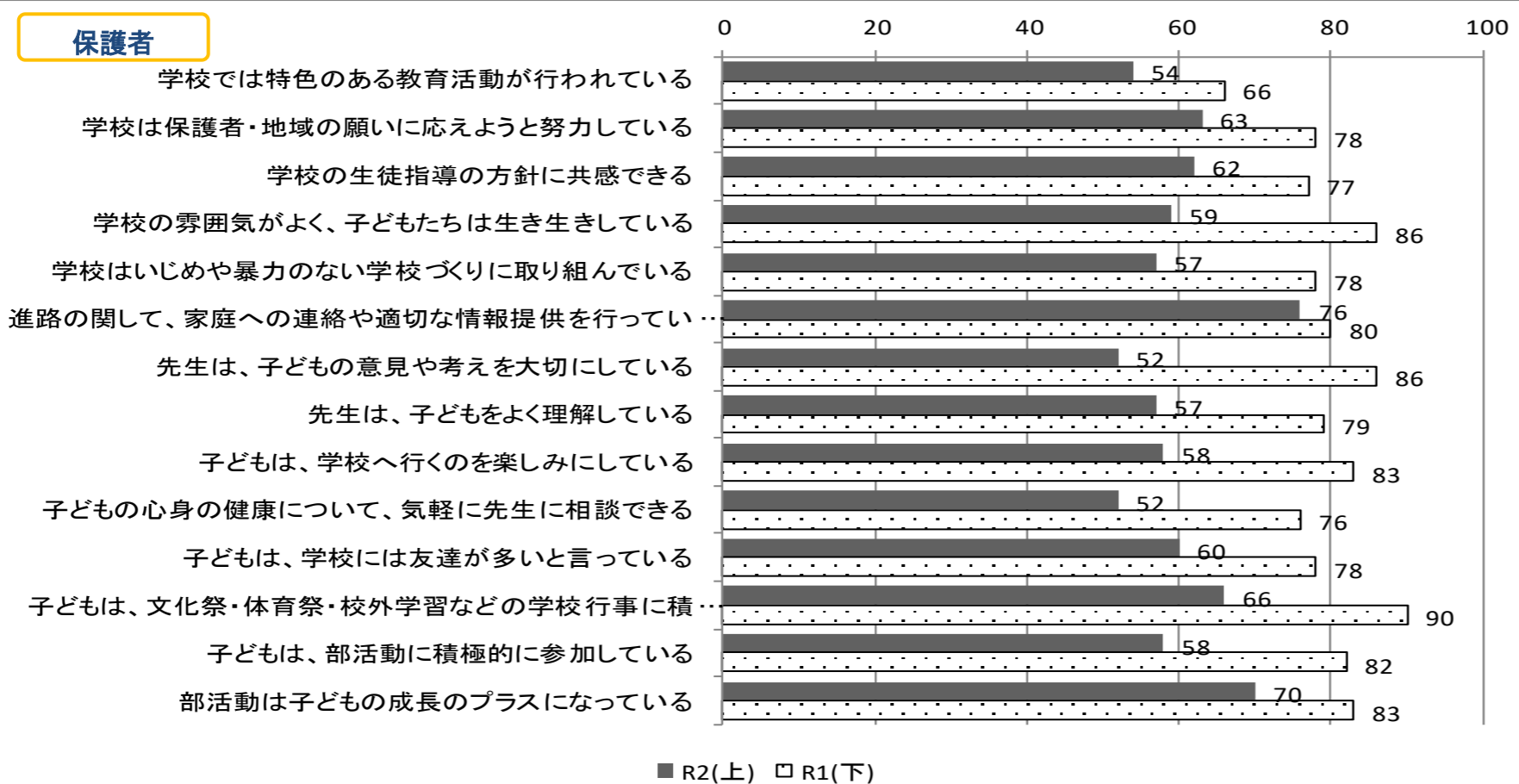
1. 学校生活 生徒指導等

注：グラフの各項目上段が令和2年度、下段が令和元年度を表しています

生徒



保護者



令和2年度 山田中学校学校教育自己診断結果概要

【アンケート実施目的】

子どもたちの学校生活を生き生きとした楽しいものにするため、学校の教育活動や組織について生徒や保護者の皆さまからの調査結果をもとに今後の学校改善の資料とする。

【アンケート実施日】 令和2年12月

【アンケート回収率】 生徒調査 93% 保護者調査 77%

【アンケート集計及びグラフの表示】

・回答項目の「A：よくあてはまる」「B：ややあてはまる」を肯定的回答としてグラフ化して表示しています。

○学校生活・生徒指導等に関する項目（生徒12項目・保護者14項目）について、昨年度と比較すると、生徒調査は「図書室をよく利用している」の項目が昨年度比で大幅に落ち込んだ。もともと図書室の利用率がよくなかったところにコロナ禍により図書室の利用制限が入ったためと考えられる。その他の項目は「学校は、あいさつ運動・授業参観などを積極的に行っている(-2%)」「学校は、決まりやマナーを守るなど、生活指導に力を入れている(-2%)」と微減、「生徒会活動に関心を持ち積極的に参加している」「先生は、いじめや校内暴力など私たちが困っていることについてよく対応してくれる」の2項目は増減なしであったが、その他の項目はすべて2%~6%増加した。特に「担任の先生以外にも気軽に相談できる先生がいる」の項目が6%の増であったことは、いじめ等への早期対応にも効果が期待でき、今後更に数値を上げたいところである。また3年生への進路情報の提供等についても94%の生徒が肯定的回答をしており、進路通信の発行数や内容、廊下等への掲示物、その他進路相談や懇談における対応等が功を奏したものと考えられる。

○今年度は新型コロナウイルス感染症の影響で、学校行事がほとんど行えず、また授業の形態も昨年度までメインとして取り組んできたグループ学習を制限され、特に年度当初からの緊急事態制限による臨時休校で授業時間が減ったうえに、6~8月の授業は一斉授業形態の教師が教える授業となり、生徒に考えさせる授業が展開できなかったことが学校としてはマイナスであった。特にその影響が、1年生の生活指導面に出ていたように感じている。その証拠に2学期後半からグループ学習を再開すると1年生の生活面での落ち着きが若干回復した。学校行事が少なくなったことは、生徒間のつながりや様々な課題の解決に挑戦する機会が減り、生徒が自らの力で問題を解決するという点についての成長の妨げとなったが、反面、日常的に教師が生徒と放課後に話をしたりする時間に若干であるが余裕ができたことにより、上記の「担任の先生以外にも気軽に相談できる先生がいる」の項目の増につながったとも考えられる。どちらに利点があるかは考え次第であるが、中学生としては自らの力で解決する力を養ってほしいところである。

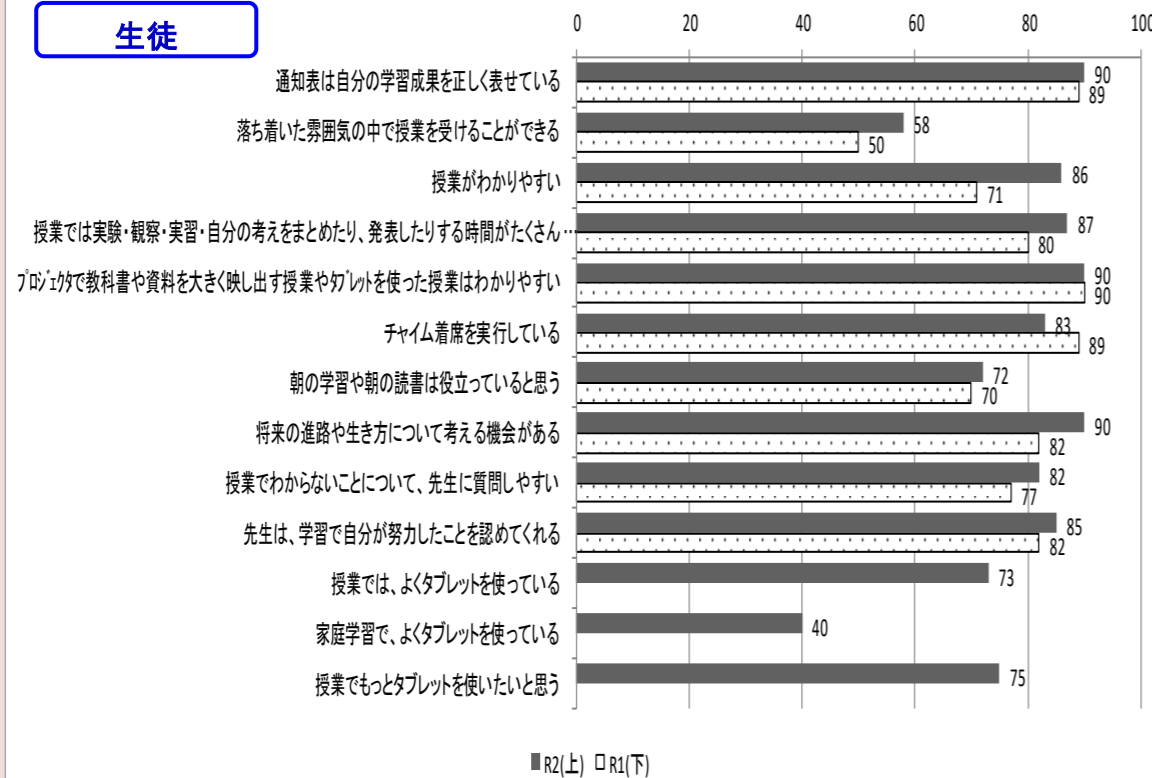
○生徒調査における「図書室をよく利用している」の項目について、大きく後退したもう一つの原因として考えられるのが、2学期から順次生徒に配布されたタブレットの存在も大きい。タブレットの活用により、授業や特に総合学習において、これまで図書室で行っていた調べ学習であったり、個々の生徒が様々な本で調べていたものが、ほぼすべてタブレットによって教室で簡単に調べられるようになったことも図書室の利用を減らしたものと考えられる。これからこの流れはさらに加速することも考えられるが、タブレットにはない本の良さというものを生徒に感じとらせ、本に親しむ文化を継承させたい。一方でタブレットの活用は枚方市をあげて推進していることから、タブレットの良さと本の良さをきっちりと理解し、使い分けができるよう工夫した指導を考えていきたい。

○昨年度と同様、生徒アンケートの「生徒会活動に関心を持ち積極的に参加している」の項目も肯定的回答が57%と高くはない。生徒会本部ではタブレットを用いたオンライン生徒朝礼に様々な工夫を加えたり、新しいアイデアを色々出している。このような生徒の新しい発想や創造をきちんと取り上げ支援し、生徒が自らの力で築き上げていけるよう学校体制を構築するとともに、生徒一人ひとりが生徒会活動にさらに主体的に自分で考えて取り組んでいく姿勢を育てていきたい。その姿勢が、如何にこれからの社会に必要な姿勢であるかを子どもたちが自ら理解するように努めたい。

○保護者調査は、すべての項目において昨年度比で大きく後退した。これは生徒のアンケート結果と全く異なる結果で、何故ここまで落ち込んだのか判断しきれない面もある。が、とにかく授業参観等の学校の中を直接見ていただける機会が激減し、2学期の土曜授業の1回だけでそれも制限付きであったことが大きな原因であると思われる。生徒にとっては毎日登校し現実学校生活を送る中で、例年とは行事や授業の形態が少し変わった点こそあるものの大きく学校生活が変化したわけではなく、学校生活上の大きな問題の発生もなかった故に例年とあまり変化ないアンケート結果になったが、保護者の皆さまにとっては、学校での生徒の生活状況は想像するしかなく、様々な情報が飛び交う中で心配事が増加してしまったことも手伝っているのではと思われる。学校での生徒の様子は11月中旬までは学校のホームページに、11月中旬以降は学校の新しいブログに相当数の記事を掲載したが、あまり閲覧数が増えることもなく、保護者の皆さまに情報を提供しきれなかったこと（宣伝不足も含めて）も原因であろう。次年度以降も新型コロナウイルスの影響は大きく残ると思われるので、保護者の皆さまへの情報の提供やつながりを如何にコロナ禍のなかで作っていくかということが次年度の大きな課題である。

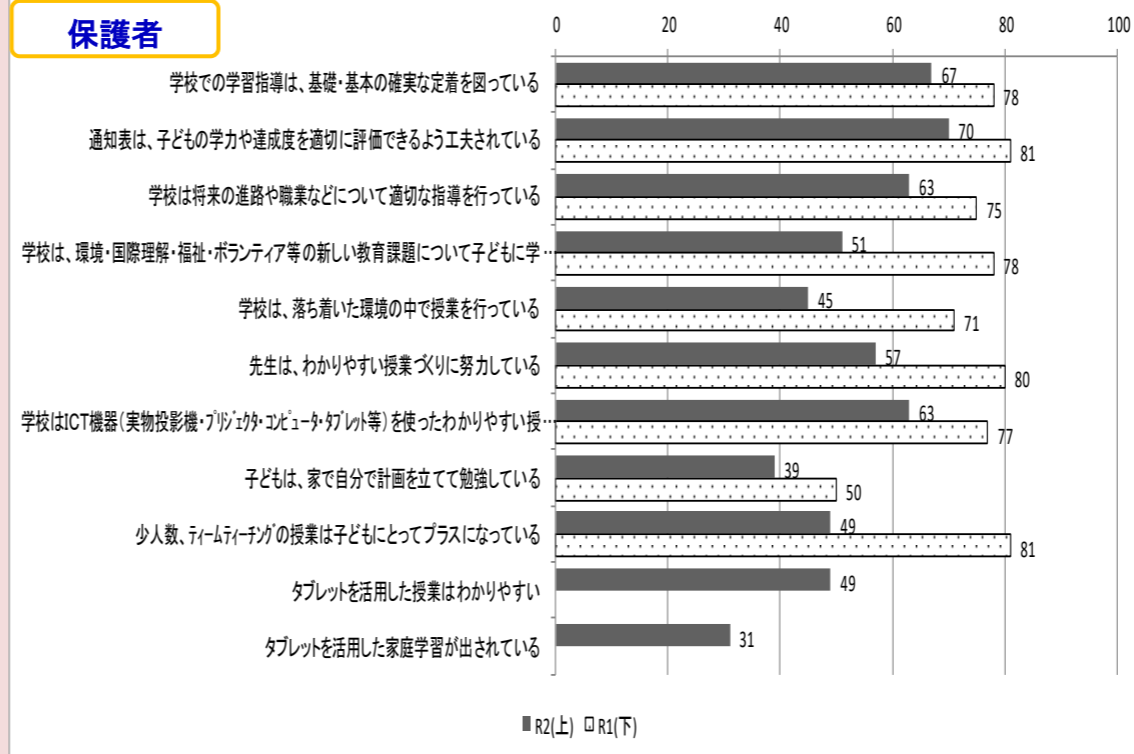
2. 学習指導

生徒



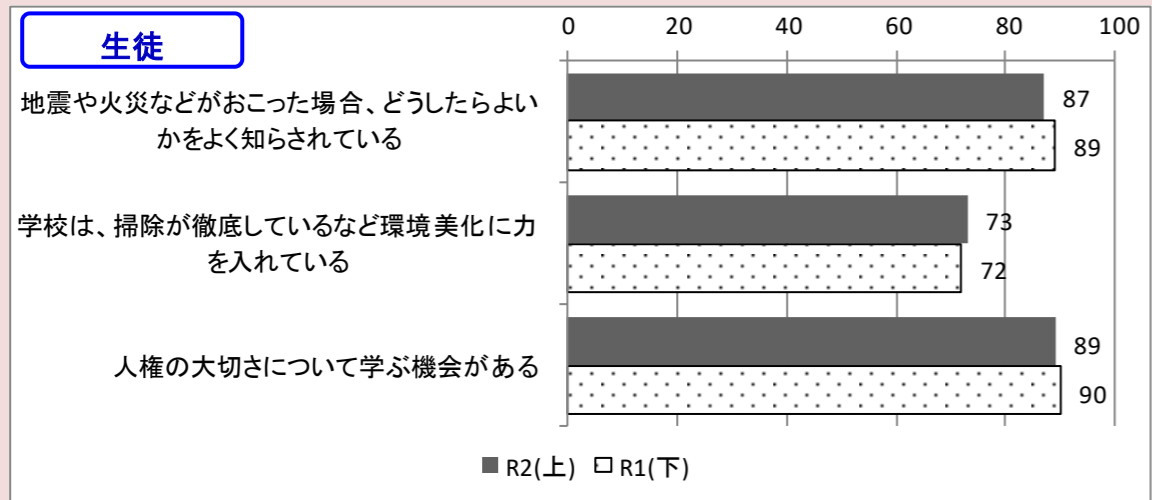
注：グラフの各項目上段が令和2年度、下段が令和元年度を表しています

保護者

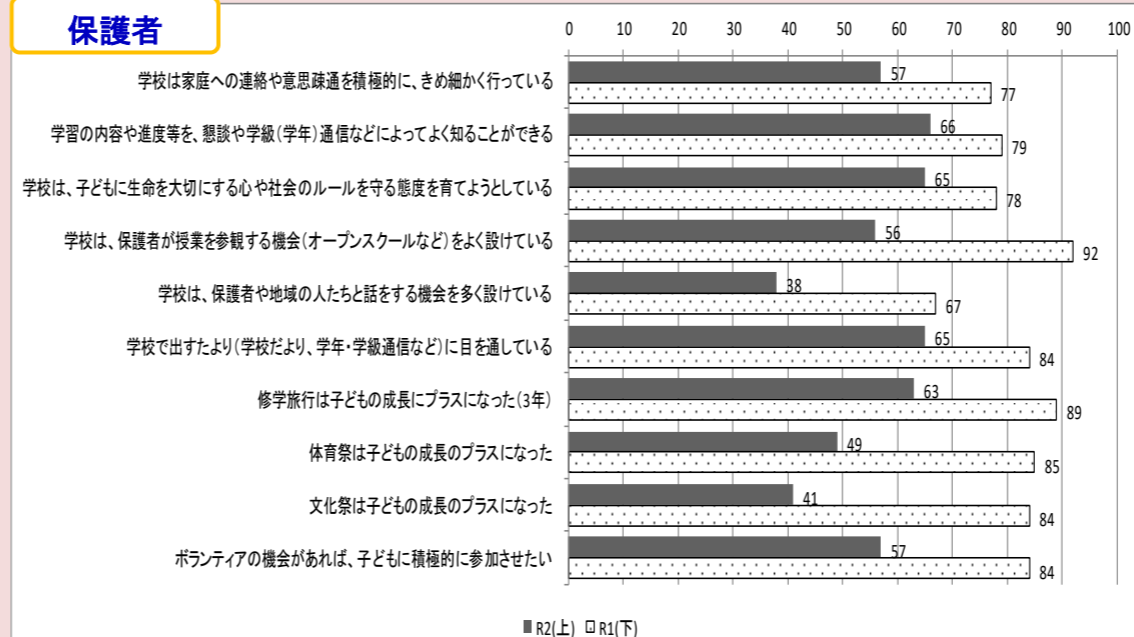


3. 学校全般・その他

生徒



保護者



4. まとめ

情報機器関連の進歩、人工知能の急速な発達、少子高齢化による労働人口の割合減少、世界経済の動向等により、急速に社会形態が変化してきています。今の子どもたちが社会に出るころの状況を見通すことは難しいですが、日本という国が今のように豊かな状態を続けていくことはかなり困難と言わざるを得ないでしょう。それとともにその社会で生き、社会を支える担い手となる今の子どもたちに必要とされる力は大きく変化すると思われまふ。その力の育成は、今までの学校教育の在り方とは相当異なるものとなるかもしれません。これまでの学校教育は、基本的に答えの存在するものを知識として持つことに重点を置いた教育をする中で、記憶するための努力などで社会に出たときの力を培うようなものでした。しかし、今の子どもたちが将来必要とする力は、答えのないものを追求する力(0から1を創造する力)であると考えられます。産業分野だけでなく、社会構造や地域社会の構築にもこれまでとは異なる創造力が求められるでしょう。主体性のない人には創造力は育ちません。従って、幼小中学校の年代の子どもたちに如何に主体性を持たせるかが教育の目標の一つになるでしょう。主体性を持たせるには自分で考え、行動する必要があります。自分で考え、自分に必要な教育を早い時期から受けるというように変化していくかもしれません。教育の平等性が教育内容から個々の人が個別に必要な教育を受ける機会の平等性へと変化することも考えられます。さらに今の子どもたちには、創造力だけでなく、高い人権意識や他者に対する柔軟な理解力や協調性、許容性、粘り強さ等々もこれまで以上に必要になります。山田中学校は、「してもらう させられる人から する人へ」をキャッチフレーズに学校の教育活動の様々な場面で主体性を引き出すた

めの取組みを研究しています。さらに「主体的・対話的で深い学び」の実現を目指して授業改善等の教育活動も進めています。今年度は新型コロナウイルス感染症の影響で、様々な制限が加わり、学校の年間計画も大幅に変更となりました。その中であって、今年度の学校教育自己診断の生徒調査にあるように、生徒たちはいくつかの項目を除き、小幅ながら肯定的回答の率を上昇させました。人は、してもらったりさせられたりしていると心が動きにくくなります。しかし、主体的に、自ら考え行動すると、大きく心が動き感動します。「主体的にする」というたった一つの心の持ち方の変化で、それまでモノクロだった世界が、突然カラーの世界に変化するがごとく、例え同じ結果であったとしても、そこから得られるものは全く違った価値を持ちます。そのような心の動きを生徒が持ったときに、その瞬間をしっかりと捉え、それを伸ばすことができる学校でありたいと常々思っています。次年度は中学校の学習指導要領が改定され、授業の形も相当に変化します。山田中学校はこれからも学習指導・生徒指導を2本柱として、新学習指導要領に対応するだけでなく、さらなる授業改善等を進め、学校の教育活動のすべての場面を活用して子どもたちの心に「主体性」を育てる取組みを推進して参ります。「わかりやすい授業」「落ち着いた静かな授業環境」を目指す授業とするのではなく、子どもたちが答えのない課題の解決に向けて、真剣に考え、仲間と議論し、自分たちの答えを見出していけるような授業を目指して、研究を進めたいと考えています。何卒、保護者の皆さまのご理解とご支援を賜れますようお願い申し上げます。

○学習指導に関する項目の生徒調査は、今年度からのタブレットに係る新項目は別として、昨年度比で「チャーム着席を実行している」の項目を除き、すべての項目で肯定的回答の割合が前年度を上回った。この内「授業がわかりやすい」の項目は(+15%)と数値的には増加したが、今年度のコロナ禍における授業の形態は教師主導による一斉授業に近い形が多く、本校が進めてきたグループ学習形態の考える授業の展開が例年のようにできていない。その為、教職員の一斉授業でのわかりやすい授業の工夫があった(「自分の考えをまとめたり発表したりする時間がたくさんある」(+7%))としても、単に生徒が覚えたり理解したりするべき内容を教師から示され自分で考える必要が少なくなったことにより、単にわかりやすくなったと感じている可能性もあり、注意が必要である。また「落ち着いた雰囲気の中で授業を受けられる(+8%)」も一斉授業の形態が多くなったことによるものと考えられる。タブレットの項目については、家庭学習での活用が進んでおらず、大きな課題である。次年度に向け活用研究を進める。

○保護者調査はすべての項目で大きく減少した。特に少人数・チーム・ペアリングに関する項目や授業中の落ち着きに係る項目での落ち込みは著しい。今年度はチーム・ペアリングに重きをおいたが、次年度は見直しも含め検討したい。今年度は学校行事や授業参観等保護者の皆さまに係るあらゆる学校との接点の変更や中止を余儀なくされたことから、コロナ禍における保護者の皆さまと学校との接点の維持と学校からの情報発信方法(オンライン授業参観等)について検討・研究していきたい。

○学校全般・その他に関する生徒調査では、3つの項目とも昨年度比でほぼ変化がなかった。その中で「掃除が徹底しているなど環境美化に力を入れている」は数値的に低いことから、さらに取り組みを強化していきたい。

○保護者調査はすべての項目において昨年度比で肯定的回答の割合は大幅な減少となった。授業参観の機会が設けられなかったことはコロナ禍において学校としてやむを得なかった。修学旅行や体育祭・文化祭の実施については、感染対策の為、様々な内容の制限や生徒主体の場の減少等もあったが、これら行事に係る子どもの成長に対するプラスか否かの肯定的回答が数値的に半減していることは、単に感染対策の為の変更だけの影響とは考えられない。このことから、次年度に向けて、これら学校行事の根本的な変更を視野に入れた取組も模索する必要があると考えられる。